

明治初年、岩鼻県における村落支配

——治安取締をめぐる動向を中心として——

藤 井 明 広

はじめに

岩鼻県は、慶応四年（一八六八）六月一七日、旧幕府時代の岩鼻陣屋を役所として創設された直轄県である。岩鼻県が管轄した地域は上野国・武蔵国は、旗本・藩領等の支配が錯綜しており、関東農村の中でも、とりわけ治安の不安定な地域とされている。本稿では、岩鼻県を事例として、明治初年における直轄県下において、どのように治安取締が行われていたのかを、徳川幕政下における関東取締出役および改革組合村との関わりを中心に検討したい。徳川幕府から明治新政府への政権交代直後における治安取締の実態を検討することは、成立して間もない直轄県が如何に安定した県政を実施しようとしたのか、また、近世・近代移行期における村々の動向を考える上でも重要な問題である^①と考える。岩鼻県については、中島明氏による岩鼻県創設の政治的過程に関する基礎的研究および貝塚和実氏による研究^②が存在するが、史料制約もあってか、岩鼻県に関する個別研究は希薄である。本稿の課題に関わる直近の研究としては、宮崎俊弥氏による明治五年（一八七二）の大区小区制形成に関する研究が挙げられる。宮崎氏は群馬県において大区小区制の設定がどのように行われたのかを検討する過程で、岩鼻県管下の戸籍区

組合村およびその前身となる岩鼻県管下村々のみで編成された組合村（＝岩鼻県支配組合）について触れているが、⁽³⁾依然として岩鼻県の官員構成や組合村を通じた村落支配の実態等、明らかにすべき点が多い。こうした岩鼻県研究の現状に関わって、宮崎氏も自身の研究について「本県（※群馬県）町村の明治初期における歴史を解明するための基礎作業を試みるものである」⁽⁴⁾としている。よって、基礎的な事柄についても検討の余地がある。⁽⁵⁾

また、関東地域の治安取締について検討を行う上では、文化二年（一八〇五）に設置され、領主の別なく警察権を行使した関東取締出役の存在、文政一〇年（一八二七）、村々に関東取締出役の取締活動の補完および御用に関わる村々の経費軽減のために関東地域を対象に編成された「改革組合村」の存在は看過できない。改革組合村は、徳川幕政下において「地域社会と領主の連携による犯罪」⁽⁶⁾「治安対策」であったとされ、機能面はもちろん、⁽⁷⁾地域運営を考える上でも、重要な役割を果たした。その後、この改革組合村は、明治初年においても継承され、各県・藩政下において解消されるまで活用されている。⁽⁸⁾ 本稿では、こうした改革組合村が明治初年の地域社会においてどのように継承され、どのように活用されたのかに留意して検討を行いたい。⁽⁹⁾

以下、本稿では、まず第一節において依然として個別研究が乏しい岩鼻県の組織構成および岩鼻県における在地取締を行う役人について検討を行い、岩鼻県の組織構成および治安取締の体制について明らかにする。続いて、第二節において、実態として岩鼻県管下村々ではどのように治安問題に対処していたのか、徳川幕政下において編成された改革組合村の一つである武蔵国妻沼村組合の変遷を中心として検討をしていきたい。

第一節 岩鼻県の成立と官員の検討

(一) 岩鼻県の成立

前述の通り、岩鼻県は慶応四年（一八六八）六月一七日に旧幕府時代の岩鼻陣屋を役所として創設された直轄県である。その支配領域は、旧岩鼻・羽生両陣屋の支配地をあわせ上野国全域および武蔵国の一部の旧幕府領・旗本領・寺社領、約三六万石にも及んだ。⁽¹⁾ 初代岩鼻県知県事（のち知事）には、大音龍太郎が就任し、以後、小室信夫、中島錫胤、青山貞によって勤められる。⁽²⁾ そして、明治四年一〇月に群馬県（第一次）へと併合される事で岩鼻県は廃止される。

(二) 岩鼻県官員の検討

本項では、岩鼻県の官員構成について検討を行いたい。まず岩鼻県創設当初の官員組織の様相について確認したい。⁽³⁾

【史料一】

（前略）維新ノ始ニ際シ当国未タ皇化ニ霑ハス所在、脱賊奸民尠カラス故ニ県治専ラ警備ヲ主トシ、其他ノ庶務ハ大抵疎略ニ帰セリ、且國中諸藩ノ領地ト旗下ノ采地ト犬牙交錯シ、其間本県ヲ置キ管スル所ノ地、偏小ニシテ吏員亦僅少ナリ、故ニ唯取調方・書記・玄関番・小頭等ノ職名ヲ設ケテ、訟獄・租税・警備等ノ諸務ヲ掌ラシメ確言タル官制ノ設ケアラス

すなわち、岩鼻県の管轄する地域は支配関係が「犬牙錯綜」していることで治安が悪く、創設当初の主な職務は「警備」にあった。⁽¹⁴⁾ところが、官員は僅かな人数であり、さらには「確言タル官制」は設けられていなかったとい⁽¹⁴⁾う。その後、明治二年七月には、京都府の職制を参考に民政（宣政・聴訟・断獄・社寺・捕亡）・地方（租税・會計・営作・駅通・庶務）・監察（監察ハ県吏之曲直勤惰ヲ監シ宿駅村落ヲ巡検シ下民安撫ノ事ヲ努ム）の三局を設置し、職制・事務体制の整備が行われる。⁽¹⁵⁾しかしながら、岩鼻県が群馬県へと統合される二ヶ月前の明治四年（一八七一）八月には、岩鼻県知事・青山貞より史官宛に官員の増員を求める願書が出され、その中で青山は岩鼻県の官員組織について「当県之儀、是迄漫然之処置多ク、更ニ一定之規則等モ無之」と記している。⁽¹⁶⁾こうした事からは、実態としては岩鼻県創設当初よりの官員構成の問題が廃県に至るまで解消されなかった事を示している。岩鼻県官員の検討をするに際して、こうした流動的な職制および人員配置の存在が障害となつていいると思われ、管見の限り岩鼻県官員について体系的にまとめた研究は確認できない。そこで本項では、こうした岩鼻県の事情を踏まえつつ、管見の限り確認できる官員名簿を素材に、官員組織について明らかにしたい。⁽¹⁷⁾

まず岩鼻県創設当初の官員について【表1】を確認したい。岩鼻県創設時の官員については、諸藩の中で勤王の志の厚い者、あるいは在野で活躍していた地域の有力者（百姓あるいは町人身分）が登用されていた事が指摘されている。⁽¹⁸⁾とりわけ後者については、最後の岩鼻代官・高島弾正より大音龍太郎への引継書の写しである「元県令高島弾正殿ヨリ知県事大音龍太郎様江引渡諸書物目録控」にも、各地域の豪農の経歴や上納金の状況等に関する記録が多く引き継がれており、各地域の豪農を掌握する事無しには、支配を貫徹することが困難であったことが窺える。⁽¹⁹⁾こうした事情が岩鼻県における百姓・町人身分出身者の登用へとつながったと考えられる。【表1】で確認できる人物では、宮崎修吉（上野国佐位郡伊与久村出身）⁽²⁰⁾・細野伝左衛門（上野国佐位郡伊勢崎町役人カ）・天田善兵衛（上

【表1】慶応4年（1868）、官員一覧

役職	氏名・人数
知県事	大音龍太郎
	小計 1名
大監察	山内熊蔵
	小計 1名
知権事補	谷口忠左衛門
	小計 1名
参傑	川勝竹次郎
	小計 1名
勸農使	大野弥五郎
	小計 1名
小廉察	小原廉治郎
	小計 1名
書記	田中左五郎、鈴木権六
	小計 2名
民政掛	田中雄三郎、金田節右衛門、諸田潤之助、 梁瀬波吉、小川範七、高山弘助
	小計 6名
訳程使 (駅運使)	宮崎修吉、細野伝左衛門
	小計 2名
水防使	後藤八郎右衛門
	小計 1名
盜賊調	海老平六郎
	小計 1名
民掛	天田善兵衛
	小計 1名
応接	堀口文平
	小計 1名
軍監	谷口驍、高庭覚之助、根岸忠蔵、松下八郎
	小計 4名
合計	24名

出典：「岩鼻県職制」（慶応4年カ）（『群馬県史 資料編10』（群馬県、1978年）より作成

※高橋伸拓「明治初期における足柄県政の成立と展開―旧葦山代官所の動向を中心に―」（小田原近世史研究会編『近世南関東地域史論』、岩田書院、2012年）の表を参考に作成

野国群馬郡下瀧村名主⁽²⁾らが登用されている。その他、岩鼻県が廃止されるまで漸次地域の豪農が登用されている。⁽²²⁾ 続いて、明治二年二月時点での官員をまとめたのが【表2】である。総員五七名、職制として知県事・民政掛（聴訴・断獄・社寺・捕亡）・取締方・庶務掛・地方掛・秩父郡取締小鹿野出張所・吾妻利根両郡取締原町出張所・役所詰小頭・御川番が確認できる。「地方」（詳細は不明であるが、租税・会計・庶務など県政事務全般を職掌する部署と考えられる）所属の官員が最も多い。また、それぞれの職務分担については詳らかではないが、民政掛内の捕亡、

【表2】明治2年2月（1869）、官員一覧

役 職	氏名・人数
知県事	小室信夫
	小計 1 名
民政掛 (聴訴・断獄・ 社寺・捕亡)	谷口忠左衛門、岩村帙雄、岡田永八、新井又太郎、黒沢覚太夫、新井三左衛門（昇三）、黒沢覚之助、松井兵右衛門（逸郎）、二宮孝作
	小計 9 名
取締方	木村誠一郎、渡辺進、佐藤丹三、門倉勇、五十嵐確藏、飯島次郎、岡田林藏
	小計 7 名
庶務掛	鈴木三郎、里見精一郎、桜井守太郎
	小計 3 名
地方掛 (租税・会計・ 営繕・駅通)	大楯建（のちに中村孚一郎に改名）、岡野金次郎、松本甚太郎、中村真之助、福嶋奥之助、宮嶋修吉、細野伝右衛門、後藤八郎右衛門、吉野三五郎、富田八郎、奈良松太郎、高橋泰藏、山下豊之助、八戸久□之助、石橋大輔、浅岡恬太郎、曾根歌八、柴田永七郎、中村勇之助、出口鎌太郎、原楠太郎、金井鉄平
	小計 22名
秩父郡取締 小鹿野出張	小原麻次郎、濱田藤治、石嶋饒、秋本仙十郎
	小計 4 名
吾妻・利根両郡 取締 原町出張	高山弘助、高木七兵衛、宮下米藏、北条精一郎
	小計 4 名
役所詰小頭	戸叶久藏、犬山喜作、今井顕助、仙之助（使丁）
	小計 4 名
御川番	三網代岩治、成瀬市郎
	小計 2 名
追加	嶋田少属
	小計 1 名
合計	57名

出典：佐藤卷之助文書292「岩鼻県御役人御名控」（群馬県立文書館所蔵）

【表3】明治2年（1869）9月、官員一覧

役職	官名	人名・人数
—	大参事	岩村（帋雄）
—	少参事	中村（孚一郎）
小計 2名		
聴訟	大属	岡田（永八）
	権大属	港谷（眞舟）
	権少属	石島（饒）
	史生	新井（昇三）
	史生	松井（逸郎）
小計 5名		
監察	大属	鈴木（三郎）
監察附属	—	飯島次郎
監察附属	—	岡田林蔵
監察附属	—	五十嵐確三
監察附属	—	田中武一郎
監察附属	—	山本央
監察附属	—	小林友七
監察附属	—	那須光三
小計 8名		
地方	大属	岡野（左司馬）
地方	少属	野口（七郎）
地方	少属	松本（甚五郎）
地方	少属	原（楠太郎）
地方	権少属	奈良（松太郎）
地方	権少属	高橋（浩三）
地方	権少属	穀東
地方	権少属	中村
地方	権少属	小林（嘉太郎）
地方	権少属	出口（鎌次郎）
地方	権少属	池田（邦太郎）
地方	権少属	山口（喜一郎）
地方	権少属	平山（猪八郎）

地方	—	布施鉄太郎
地方	—	河野禄太郎
小計 15名		
庶務	権大属	皆川（昌）
庶務	—	金井鉄平
小計 2名		
郡中取締	少属	高山（弘助）
郡中取締	少属	島田（良平）
郡中取締	権少属	渡辺（進）
郡中取締	権少属	佐藤（丹三）
小計 4名		
社寺	権少属	新居（守村）
小計 1名		
訟所	准史生	武市（富之進）
小計 1名		
小地方	准史生	清水（貞一郎）
小計 1名		
小会計	准史生	桜井（守太郎）
小計 1名		
小頭	—	犬山顕介
小頭	—	今井喜作
小使	—	仙之助
小使	—	治兵衛
小使	—	新助
小計 5名		
合計 45名		

出典：青木喜大夫家文書2894「岩鼻県
官員録」（茨城県立歴史館所蔵）

※（ ）内は、行政文書2825「岩鼻県
官員録」、佐藤卷之助文書292「岩鼻
県御役人御名控」（いずれも群馬県
立文書館所蔵）により名前を補った

取締方という治安取締に関する役職、および秩父取締小鹿野出張所、吾妻利根両郡取締原町出張所が設置され、治安取締の任にあたっている。⁽²³⁾【表3】は、明治二年七月の職制整備直後の明治二年九月における官員一覧である。職制には聴訴・監察・監察附属・地方・庶務・郡中取締・社寺・訟所・小地方・小会計が確認できる。そして、官員の総数は四五名と職制整備前より減少している。これは、明治二年七月の職制整備に伴い、人員整理が行われたためである。例えば、明治二年七月七日付で、富田八郎ほか五名が、「官員減省ニ付役儀差免」となり、「差当難渋ニも可有之、仍出格之御評議ヲ以、当年中式人扶持被下置候⁽²⁴⁾」と、退職後の保障を受けている。続いて【表4-1】は、明治三年五月当時の「官員録」に記述にされた、名前、姓諱、役職、分課等をまとめたものである。また、【表4-2】は官員を旧所属ごとにまとめたものであり、【表4-3】は官員を役職・分課ごとに旧所属・身分をまとめたものである。これらの表からは、次のことが指摘できる。①明治三年五月当時、岩鼻県官員の役職には、知事・大参事・少参事、分課として庶務・教令・勸農・監察が確認でき、明治二年七月当時の職制が改変されているのが確認できる。②官員を旧所属ごとの割合でみていくと、岩鼻県では、明治三年当時においても静岡藩を含む旧幕府関係者が全体の半数以上を占め、とりわけ旧幕府代官所の手付・手代が大勢を占めている。すなわち、明治三年段階においても旧幕府関係者が官員として県の運営に関与していたことが窺える。しかしながら、その一方で、知事・大参事・小参事などの役職者には、徳島藩以下高鍋藩・小幡藩と諸藩の出身者が続いている。とりわけ知事・大参事・少参事を徳島藩士が占めている。また、岩鼻県官員の特徴として武士身分のみではなく、少なからず百姓出身者が官員を勤めているのがわかる。こうした傾向は、前述の通り地域住民の登用無くして民政の把握が困難であった岩鼻県の事情が関係していると思われる、③百姓出身の官員を含め、朝臣であることを象徴するように、源・平をはじめとした姓を名乗っているが、その根拠は不明である。

明治初年、岩鼻県における村落支配

【表4－1】明治3年（1870）5月、岩鼻県官員一覧

	名前	姓・諱	役職・分課	等級	備考	旧所属
1	中嶋直人 (錫胤)		(知事)	—	(徳島藩士族)	徳島藩
2	岩村虎雄	藤原兼喜	大参事	—	(貼紙)「免本官 辛未四月 太政官」 高鍋藩士族	高鍋藩
3	中村孚一郎	源頼雄	大参事	—	(貼紙)「免本官 辛未四月 太政官」 徳島藩士族	徳島藩
4	若葉廣道	平廣道	少参事	—	徳島藩 (士族カ)	徳島藩
5	武庫静	藤原昌啓	庶務	少属	岩鼻県士族 (旧吉井藩士族)	岩鼻県
6	出口鎌次郎	源直方	庶務	権少属	旧幕府陸軍奉行支配器械製造所俗事役並	旧幕府
7	武市富之進	越智芳長	庶務	史生	徳島藩士族	徳島藩
8	澁野禎蔵	藤原廣一	庶務	等外	旧幕府賄六尺	旧幕府
9	港谷眞舟	平眞舟	教令	権大属	徳島藩士族	徳島藩
10	高山弘助	源重道	教令	権大属	岩鼻県士族 (旧吉井藩士族)	岩鼻県
11	増田就雄	源敬喜	教令	権大属	旧幕府代官手附	旧幕府 (代官所)
12	嶋田良平	平光胤	教令	少属	宮谷県支配所上総山辺郡桂山村百姓	百姓
13	児玉環	藤原環	教令	少属	岩鼻県士族 (新潟奉行手附)	岩鼻県
14	新居守村	水上守村	教令	少属	小幡藩士族 (上野国甘楽郡高瀬村住居)	小幡藩
15	小松愿吾	藤原朝光	教令	少属	野州宇都宮市民 (百姓)	百姓
16	香川三郎	平景信	教令	少属	西京洛外中口崎村産	(不明)
17	佐藤丹三	藤原朝愛	教令	権少属	神奈川県支配所相州大住郡大山襷宜佐藤主水二男	(不明)
18	大熊團平	源信義	教令	権少属	旧幕府代官手代	旧幕府 (代官所)
19	黒川正治	藤原正治	教令	権少属	(貼紙)「分課教令 五月」 静岡藩山岡大参事内	静岡藩
20	新井昇三	源善教	教令	史生	岩鼻県支配所上州吾妻郡原町百姓／ 三左衛門	百姓
21	松井逸郎	源経邦	教令	史生	岩鼻県支配所上州吾妻郡原町百姓／ 兵右衛門	百姓
22	武島弥一郎	源延之	教令	等外	名護屋藩士族木全弥三兵衛弟	名護屋藩
23	大島弥市	源光重	教令	等外	岩鼻県支配所上州緑野郡金井村百姓	百姓
24	岡崎州三	原精一	教令	等外	参州岡崎宿百姓	百姓
25	渡邊渡	源方秀	教令	等外	弁官支配中根賢三郎元家来	(不明)
26	岡野左司馬	源親美	勸農	大属	東京府卒族 (旧幕府代官手附)	旧幕府
27	皆川昌	藤原昌	勸農	権大属	元中大夫溝口直景 (交代寄合) 内	旧幕府
28	野口七郎	源久敬	勸農	権大属	旧幕府代官手代	旧幕府 (代官所)
29	梅竹規矩郎	藤原漸	勸農	権大属	静岡藩士族	静岡藩
30	松本甚五郎	藤原定恭	勸農	少属	朝臣曲淵敬太郎触下	旧幕府

31	奈良松太郎	源勇義	勸農	少属	旧幕府代官手附	旧幕府（代官所）
32	高橋浩三	藤原喜悌	勸農	少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
33	設楽龍太郎	藤原實 (安貞)	勸農	少属	旧幕府上下格勤仕並小普請	旧幕府
34	杉本麟次郎	源保寿	勸農	少属	旧幕府代官手附／元関東取締出役	旧幕府（代官所）
35	中村義安	源義安	勸農	少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
36	仲田精作	藤原則	勸農	少属	旧幕府徒目附	旧幕府
37	篠崎忠雄	藤原徳彰	勸農	少属	(貼紙)「三年正月任判任少属」 静岡藩士族	静岡藩
38	小林嘉太郎	源宣忠	勸農	権少属	兵部省附触頭世話取扱小林徳太郎倅 旧幕府代官手附	旧幕府（代官所）
39	池田邦太郎	源政成	勸農	権少属	旧幕府関東在方役	旧幕府（代官所）
40	山口喜一郎	源喜成	勸農	権少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
41	平山猪八郎	源盛積	勸農	権少属	牛久藩士族	牛久藩
42	西山義武太郎	源広綱	勸農	権少属	旧幕府関東在方役	旧幕府（代官所）
43	服部乾	源憲幸	勸農	権少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
44	秋葉邦相	源正寧	勸農	権少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
45	小川玄吾	源證	勸農	権少属	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
46	坂録太郎	藤原知孝	勸農	史生	旧幕府普請役見習	旧幕府
47	成城□一郎	源行喜	勸農	史生	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
48	清水貞一郎	源貞利	勸農	史生	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
49	寺田毅四雄	源國道	勸農	史生	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
50	杉浦部	源公謹	勸農	史生	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
51	梅田政一郎	源政布	勸農	史生	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
52	武沢楠之助	源正賢	勸農	史生	在東京府附岡部鉦次郎触下	旧幕府
53	山下精作	源正長	勸農	史生	東京府附久松侶之先触下山下元一郎倅	(不明)
54	那須光三	丹治宗林	勸農	等外	元土御門家内	土御門家
55	小林友七	源照房	勸農	等外	若森県支配所常陸筑波郡小張村百姓	百姓
56	野口綱三郎	源久保	勸農	等外	岩鼻県大属久敬（旧幕府代官手代）倅	旧幕府
57	村上金三郎	源正茂	勸農	等外	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
58	若葉廣道	平廣道	監察	大属	徳島藩士族	徳島藩
59	福田太郎	源義信	監察	権大属	静岡藩士族	静岡藩
60	菅沼（石嶋）饒	藤原敏臣	監察	権少属	(貼紙)「浦和県支配所武州大里郡相上村吉見□□天神神主宮司菅沼從五位養子」あるいは「前橋藩支配所常州河内郡泉村名主惣右衛門弟」	(不明)
61	田中武一郎	藤原信寿	監察	等外	摂州大阪市民	市民
62	小国健吉	源利強	監察	等外	久美浜県支配所丹後熊野郡佐野村百姓	百姓

明治初年、岩鼻県における村落支配

63	宮城助七	藤原信之	監察	等外	東京本所市民	市民
64	河野録太郎	藤原忠告	—	等外	旧幕府代官手代見習	旧幕府（代官所）
65	渡邊千吉	源親在	—	等外	旧幕府代官手附	旧幕府（代官所）
66	矢部貞三	小野忠彦	—	等外	旧幕吏	旧幕府
67	増戸武兵衛	藤原秀寧	—	少属	(朱書)「未三月」 上ノ山藩士族	上ノ山藩
68	鰐嶋丹治		—	等外		(不明)
69	小村義夫	平正路	—	等外		(不明)
70	櫻井守太郎	源冽	—	等外		(不明)
71	奈良又吉	源勇敢	—	等外	当県 勇義（旧幕府代官手附）弟	旧幕府
72	稲垣耕助	藤原久義	—	等外	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
73	原曹三	源政徳	—	等外	旧幕府代官手代	旧幕府（代官所）
74	長持録之助	藤原正信	—	等外	東京府□□ 明治3年3月15日、岩鼻県出仕	(不明)
75	宮本金平	藤原持寿	—	等外	牛久藩支配所常州河内郡城中村百姓	百姓

出典：行政文書2825「岩鼻県官員録」、折茂幹一家文書4678「巖鼻県人員録」（いずれも群馬県立文書館所蔵）より作成

【表4－2】岩鼻県官員の身分

所 属	人数
幕府（代官所）	36 (24)
徳島藩士族	6
静岡藩士族	4
岩鼻県士族	3
高鍋藩士族	1
小幡藩士族	1
上ノ山藩士族	1
牛久藩士族	1
名護屋藩士族	1
土御門家内	1
百姓	9
市民	2
不明	9
合 計	75

出典：行政文書2825「岩鼻県官員録」、折茂幹一家文書4678「巖鼻県人員録」（いずれも群馬県立文書館所蔵）より作成

【表4—3】岩鼻県官員一覧（役職・分課別）

役職・分課	人数 (75)	等 級 (旧 所 属)
知事	1	徳島藩士族 1
大参事	2	高鍋藩士族 1、徳島藩士族 1
少参事	1	徳島藩士族 ㍿
庶務	4	少属 1（岩鼻県士族 1） 権少属 1（旧幕府陸軍奉行支配器械製造所俗事役並 1） 史生 1（徳島藩士族 1） 等外 1（幕府賄陸尺 1）
教令	17	権大属 3（徳島県士族 1、岩鼻県士族 1、旧幕府代官手代 1） 少属 5（百姓 2、岩鼻県士族 1、小幡藩士 1、不明 1） 権少属 3（旧幕府代官手代 1、静岡県山岡大参事内 1、不明 1） 史生 2（百姓 2） 等外 4（名護屋藩士族弟 1、百姓 2、不明 1）
勸農	32	大属 1（東京府卒属） 権大属 3（交代寄合内 1、幕府代官手代 1、静岡藩士族 1） 少属 8（曲淵敬太郎触下 1、旧幕府代官手附 2、同手代 2、旧幕府上下格勤仕並小普請 1、旧幕府徒目附 1、静岡県士族 1） 権少属 8（旧幕府関東在方役 2、旧関東代官手代 4、牛久藩士族 1、不明 1） 史生 7（旧幕府代官手代 5、岡部鉦次郎触下 1、東京府附久松侶之先触 1） 等外 4（元土御門家内 1、百姓 1、旧幕府手代 1、同子息 1）
監察	6	大属 1（徳島藩士族 1） 権大属 1（静岡藩士族 1） 権少属 1（不明） 等外 3（市民 2、百姓 1）
不明	12	旧幕府代官手附 1、同手附弟 1、同手代 2、同手代見習い 1、市民 1、百姓 1、旧幕吏 1、上ノ山藩士族 1（少属）、不明 4

出典：行政文書2825「岩鼻県官員録」、折茂幹一家文書4678「巖鼻県人員録」（いずれも群馬県立文書館所蔵）より作成

以上、岩鼻県創設当初の課題は治安取締にあり、その主な職務は「警備」にあった。そこで、民政掛内の捕亡、取締方の役職および秩父取締小鹿野出張所、吾妻利根両郡取締原町出張所などの出張所を設け対応をしていたことが窺える。また、県創設から二年後の明治三年段階においても、基本的には旧幕府出身者により事務が遂行され、知事をはじめ一部の旧藩士が幹部として全体を掌握するという形で県の運営がなされていたことが指摘できる。旧代官所在地に創設された直轄県において、旧代官所役人が登用されていることは、他県の事例でも指摘されており、明治三年段階の岩鼻県においても同様の傾向を示しているといえる。⁽²⁵⁾ 次項では、こうした官員の内、地域社会の治安取締に従事した官員について地方史料に基づいて検討していきたい。

(三) 岩鼻県取締出役による治安取締活動

岩鼻県では、「国中取締之義、当春（※明治二年）以来旧関東取締出役之取計ニ准シ、出役廻在取締為取計置候」⁽²⁶⁾ というように、明治二年の春より関東取締出役の役割に准ずる役人を廻村させ、組合村（改革組合村および、明治二年一〇月以降は後述の岩鼻県支配組合）へ指示を行っている。本項では、岩鼻県官員の内、在地において治安取締を担った「岩鼻県取締出役」（史料中には「岩鼻県御取締御出役」⁽²⁷⁾ や「岩鼻県郡中御取締出役」⁽²⁸⁾ 等とある）について検討したい。【表5】は、明治二年～三年にかけて、「岩鼻県取締出役」の肩書が確認できる人物について、不明な点が多いが、その経歴をまとめたものである。わずかではあるが彼らの経歴から、岩鼻県取締出役とは「郡中取締」の職務を担う官員であったことが推察される。なお、「岩鼻県取締出役」という呼称は、岩鼻県管下の村々が提出する願書等、地方文書内には確認できるが、「官員録」等の公的な行政文書には見いだせない。彼らの活動について、次の史料を確認したい。⁽²⁹⁾

【表5】岩鼻県取締出役の経歴

No.	名 前	経 歴	備 考
1	鈴木三郎	明治元年12月17日、岩鼻県出仕 → 同2年7月7日、調役頭取 → 明治3年5月当時には退職	上州群馬郡榛名山神主、穂積虎臣
2	二宮孝作	明治2年1月、下調方補 → 同年7月7日、官員減省の為、免職	
3	木村誠一郎	関東取締出役カ → 明治2年2月、郡中取締方裁判 → 同年7月7日、調役補 → 明治3年5月当時には退職	
4	渡辺進	明治2年1月、郡中取締方 → 同年10月4日、依願免職	
5	佐藤丹三	明治2年1月、郡中取締方 → 同3年5月当時、分課教令に所属を確認 → ???	神奈川県支配所相州大住郡大山禰宜佐藤主水二男、藤原朝愛
6	石 隴（菅 沼） 饒	明治2年1月、下調方 → 同年7月7日、郡中取締方 → 同4年6月18日、免職	浦和県支配所武州大里郡相上村吉見〔 〕天神神主宮司菅沼従五位養子
7	嶋田良平	明治2年2月、郡中取締方裁判 → 同年7月7日、調役補 → 明治3年5月、分課教令に所属を確認 → ???	宮谷県支配所上総山辺郡桂山村百姓（旗本小栗氏知行所名主）、平光胤 ※詳細は川村優「小栗氏の知行所支配」『旗本領郷村の研究』（岩田書院、2004年）参照。

※知事84A-59「岩鼻県官員進退録」（明治元年～同4年）、行政文書2825「岩鼻県官員録」、折茂幹一家文書4678「巖鼻県人員録」（いずれも群馬県立文書館所蔵）をもとに作成

【史料二】

武州比企郡

平村

政五郎

右之もの儀、悪事有之、探索先見掛次第召捕候筈ニ付、其処役人立会諸事無差支様可被取計候也

岩鼻県

郡中御取締出役

巳七月廿三日

佐藤丹三^⑨

石陽饒

武州秩父郡

大野村

名主 恒右衛門

右の史料は、「武州比企郡平村政五郎」という人物の手配書である。この文書からは、関東取締出役同様に「悪事」の取締を行っているのが確認でき、各地で囚人の探索や捕縛した囚人の村預け等をしているのが確認できる。その他にも、①明治二年初頭より政府発行の金札が偽札であるという噂が広がった際には、金札通用に関する請書を提出させる^⑩、②検見実施時の村から役人への賄賂の調査等^⑪、岩鼻県取締出役と地域住民が連携することで、岩鼻

県管下村々の治安取締等が行われていた。

また、上野国玉村宿組合大惣代を勤めた渡辺三右衛門の日記、通称「三右衛門日記」には、岩鼻県取締出役設置前後の治安取締に関する岩鼻県官員の動向について窺える記事がある。⁽³²⁾例えば、明治元年（一八六八）二月二〇日、⁽³³⁾三右衛門は初めて岩鼻県官員・嶋田良平と対面しているのが確認できる。嶋田良平とは、明治元年二月当時における役職は不明であるが、翌明治二年二月に「郡中取締裁判」として役職が確認でき、この頃より岩鼻県取締出役として各地で活動が確認できる人物である。⁽³⁴⁾この対面の経緯について日記には、「東京府より元関東取締出役相勤候木村信一郎様より添状ニ而嶋田良平様與申方来ル」とある。すなわち、百姓出身である嶋田良平が元関東取締出役・木村信一郎による紹介で、三右衛門と引きあわされていることが明らかとなる。また、翌二二日には、「我等者昨日御頼ヲ請、探索御用ニ罷出候、夕刻帰宅仕候」とあり、二〇日の初対面の場において、三右衛門は嶋田良平から探索の御用を仰せ付けられていたことが確認できる。⁽³⁵⁾その後も、嶋田良平はたびたび三右衛門宅を訪れ、極秘の探索を三右衛門へ依頼している。なお、内密御用の内容については、例えば、明治二年二月三日、⁽³⁶⁾岩鼻県「取締方助」である門倉勇⁽³⁷⁾の行状について、三右衛門は嶋田良平に次のように報告している、「明治二年一月二八日、門倉は始めて萬屋幸兵衛方を訪れ下女を相手に遊んでいる。その後、翌二月一四日〜十六日の間、門倉は幸兵衛方へ訪れては下女を相手に遊び、十五日には未払いの駕籠代を催促してきた幸兵衛を切り捨てると脅した」、というものである。また、同年三月五日には、三右衛門は嶋田良平より村落間の紛争について内密の調査を依頼されている。⁽³⁸⁾このように、岩鼻県官員の嶋田良平は元関東取締出役の紹介により改革組合村の元大惣代と接触し、内密御用を依頼していた。そして、明治二年、岩鼻県取締出役が設置されると、岩鼻県取締出役として各地で治安取締をはじめとした職務を遂行している。こうした事からは、岩鼻県取締出役の活動には、各地の元大惣代を通じた情報網

が活用されていた事が窺える。

以上、本項の検討からは次の点が指摘できる。①岩鼻県取締出役は、徳川幕政下で活動した関東取締出役の存在をモデルとしていた。また、岩鼻県取締出役とは地方史料にみえる名称であり、岩鼻県では「郡中取締」の職務を担う官員がこの職を勤めたものと思われる。②わずかな記述ではあるが、上野国玉村宿組合元大惣代・渡辺三右衛門の日記からは、三右衛門と岩鼻県官員（のちに岩鼻県取締出役）嶋田良平が元関東取締出役の紹介で引きあわされていることや、嶋田良平が元大惣代である三右衛門へ岩鼻県官員の行状および村落間の紛争に関する情報等の内密御用を依頼し、その情報を入手していることが窺えた。すなわち、岩鼻県では明確に徳川幕政下における関東取締出役および大惣代経験者のノウハウが活用されており、その連続性が窺える。次節においては、実態として岩鼻県管下村々ではどのように治安問題に対処していたのか、徳川幕政下において編成された改革組合村の一つである武蔵国妻沼村組合の変遷を通して検討を行いたい。

第二節 改革組合村から岩鼻県支配組合へ

（一）妻沼村組合の編成と運営

本項では、本節において中心的に検討を行う武蔵国妻沼村組合について概観したい。詳細は後述するが、この妻沼村組合は徳川幕政下において編成された改革組合村の一つであり、徳川幕府崩壊後においては構成村の大部分が岩鼻県に所属、明治二年一〇月以降には岩鼻県支配組合として新たに三つの組合へと再編・分割されている。なお、特に断らない限り「妻沼村組合」とは「改革組合村」としてのまとまりを示している。

妻沼村組合の構成は【表6】の通りである。寄場は聖天宮の門前町として栄えた妻沼村である。この表は、当該地域に重層的に存在する組合村（明和以前編成の自生的組合・江袋溜井堤組合・御霞組合・浪人取締組合）をまとめたものである。⁽³⁹⁾ 妻沼村組合の構成は明和期において浪人者等への対応のために編成された組合村が基礎となっていたと考えられる。こうした事からは、妻沼村周辺において、明和期には治安の悪化が問題視されていた事が窺える。

続いて、妻沼村組合の運営を主導的に担う「大惣代」についてみていきたい。当初、大惣代は「副議定之事」に沿って年番で勤められていた。⁽⁴⁰⁾ しかしながら、天保五年以後は、妻沼村の鈴木家（勝右衛門・正助）、上江袋村の長嶋家（作左衛門）、葛和田村の江森家（三右衛門）の三家が、それぞれ定番で慶応年間まで勤めている。また、【表7】は、惣代層の身分・年齢・持高・生業をまとめたものである。この表からは、持高二七〇石余で質屋を営む上江袋村長嶋作左衛門を始め、多くの寄場役人・大小惣代が農業の他に、質屋や万屋、材木商、利根川の水運を利用した川船積問屋などの商売を営んでおり、地域の豪農層により惣代が勤められたことがわかる。では、こうした豪農層により主導された改革組合村の存在は、当該地域においてどのように認識されていたのだろうか。次の史料は、慶応四年四月という徳川幕府倒壊直後において作成された議定である。⁽⁴¹⁾

【史料三】

組合議定書之事

今般御改革御一新之趣ニ付而者、是迄関東御仕置等御廃止相成候向も可有之哉難斗候得共、一体御取締組合御取立之儀ハ、格別之御良法、一同難有相心得候ニ付、仮令御改革如何様御変革相成候共、都而先前之御趣意相守候様致度、殊ニ当寄場組合之儀者、聊も諫言無之元来和睦致居候ニ付、右之□□を不失実意申

【表6】妻沼村組合の構成

小組合	村名	石高(石) (文政12年)	支 配			自生の組合 (明和以 前より)	江袋溜井 堤組合 (21ヶ村)	江袋溜井 用水組合 (9ヶ村)	御震 組合	浪人取 締組合
			文政12年	慶応4年	明治2年 2月					
寄場	妻沼村	1622.283	代官所、 旗本4給	羽生附御 料所	岩鼻県	○	○	×		
A 小組合石 高(石) 1783.234	小嶋村	422.828	代官所、 旗本3給	羽生附御 料所、旗 本4給	岩鼻県	○	○	×		
	男沼村	465.39	代官所、 旗本3給	旗本3給	岩鼻県	○	○	×		①
	台村	483.661	清水領	忍藩領	忍藩	○	○	×		①
	出来嶋村	411.355	清水領	忍藩領	忍藩	○	○	×		①
	弥藤吾村	1425	清水領、 旗本5給	忍藩領、 旗本5給	忍藩・岩 鼻県	○	○	○		
B 小組合石 高(石) 3037.2649	飯塚村	750	旗本3給	旗本4給	岩鼻県	○	×	×	①	①
	八木田村	762.2649	旗本2給	旗本3給	岩鼻県	○	○	○	①	
	原井村	100	旗本2給	旗本3給	岩鼻県	(○)	×	○		
	堀米村	388.376	代官所、 旗本3給	旗本4給	岩鼻県	×	×	×		
	太田村	1412.086	旗本3給	旗本3給	岩鼻県	○	○	×	①	①
C 小組合石 高(石) 3284.623	江原村	623.954	清水領、 旗本4給	忍藩領、 旗本4給	忍藩・岩 鼻県	×	○	×		①
	間々田村	739.255	清水領、 旗本2給	忍藩領、 旗本2給	忍藩	○	○	×		①
	市ノ坪村	120.952	旗本2給	旗本2給	岩鼻県	○	×	×	①	
	西野村	335.944	旗本3給	旗本3給	岩鼻県	○	○	○	①	
	上江袋村	541.674	旗本1給	旗本1給	岩鼻県	○	○	○	①	①
D 小組合石 高(石) 2742.468	上根村	610.847	旗本1給	旗本1給	岩鼻県	○	○	○	①	
	田嶋村	345.58	旗本2給	旗本2給	岩鼻県	○	○	○	①	
	西城村	908.423	旗本2給	旗本2給	岩鼻県	○	○	○	①	
	善ヶ嶋村	961	清水領、 旗本4給	忍藩領、 旗本4給	忍藩・岩 鼻県	○	○	×		
	上須戸村	671.217	旗本3給	旗本3給	岩鼻県	○	○	×		
E 小組合石 高(石) 2596.64	八ッ口村	558.841	旗本3給	旗本3給	岩鼻県	○	○	×		
	江波村	405.582	旗本2給	旗本2給	岩鼻県	○	○	×		
	葛和田村	2069.785	清水領	羽生附御 料所、旗 本2給	岩鼻県	○	×	×		
	弁才村	120.795	清水領	忍藩領	忍藩	○	×	×		
	日向村	841.33	清水領	忍藩領	忍藩	○	○	×		
F 小組合石 高(石) 3314.858	俵瀬村	282.948	清水領	忍藩領	忍藩	○	×	×		
						他に下増 田村(現熊 谷市)、本 田谷村(現 深谷市)	他に肥塚 村	他に道ヶ 谷戸村※ 1		他に小 前屋村

出典：荒井家文書136（熊谷市史編さん室所蔵）、長嶋家文書173・462・562・573（埼玉県立文書館所蔵）、『長嶋家・松岡家文書目録』（埼玉県立文書館、1987年3月）、『日本歴史地名体系第11巻 埼玉県の地名』（平凡社、1993年11月）、妻沼町誌編纂委員会『妻沼町誌』（妻沼町役場、1977年3月）より作成

【表7】嘉永2年（1853）当時の改革組合村惣代層と道案内

役名	村名	就任	身分	年齢	所持高	名前	備考
寄場役人	妻沼村	天保8年	名主	51歳	35石	所左衛門	質物取引渡世
寄場役人	妻沼村	文政11年	名主	53歳	20石余	吉郎兵衛	万商渡世
寄場役人	妻沼村	弘化3年	名主	47歳	29石	惣左衛門	万商・質物取引渡世
寄場役人	妻沼村	嘉永4年	名主	29歳	20石余	(鈴木) 正助	材木類渡世
大惣代	葛和田村	(天保)	名主	59歳	24石余	(江森) 三右衛門	川船積問屋渡世
大惣代	上江袋村	(天保)	名主	40歳	270石余	(長嶋) 作左衛門	貸金質物取引渡世
大惣代	妻沼村	(天保)	名主正 介父	53歳	20石余	(鈴木) 勝右衛門	材木類渡世
小惣代	上根村	—	組頭	54歳	20石	太右衛門	農業一統
小惣代	江波村	—	名主	40歳	70石	善右衛門	質物取引渡世
小惣代	出来島村	—	名主	62歳	19石2斗	(高野) 平六	農業一統、忍藩領
小惣代	弥藤吾村	—	名主	35歳	30石	仲吾	農業一統
小惣代	俵瀬村	—	名主	45歳	42石	(荻野) 綾三郎	藍玉商ひ渡世
小惣代	堀米村	—	名主	41歳	26石2斗	忠次郎	農業一統
道案内	弁才村	嘉永元年	百姓	41歳	10石	勘右衛門	農業一統
道案内	妻沼村	嘉永4年	百姓	50歳	7石	丹次郎	農業一統

出典：長嶋家文書552（埼玉県立文書館所蔵）より作成

※（ ）内は筆者による

合、全取締筋相立候様可致候、就而者以来集会之節、寄場役人・当番者村々役人出席前、会所江詰、御廻村々二而者、寄場より触出し候通、刻限違参、不参無之様一同急度出会可致候

右議定之通向後違失致間敷候、依之村々連印如件

寄場

妻沼村

名主見習

慶応四年戊辰年四月

金四郎

(他二六ヶ村二六名略)

右の史料からは、今後官軍により徳川幕政下で行われてきた「御仕置等」が廃止されていくやも計り難い中で、改革組合村を維持し活用する官軍の方針に対して「格別之御良法」と表現している。また、そうした理由として、「当寄場組合之儀者、聊も諫言無之元来和睦致居候」と、寄場と組合村の良好な関係性を挙げている。従来、寄場と組合村の関係性については、両者を対立的な構図で捉える事が多いが、妻沼村組合の場合には、寄場役人である鈴木正助と大惣代鈴木勝右衛門が親子関係にあり、嘉永期には寄場役人を勤めていた正助が、父勝右衛門に代わって大惣代を勤めているのが確認できる。⁴⁴すなわち、妻沼村組合では、大惣代と寄場役人が臨機応変に勤められており、密接な関係にあったことが指摘できる。こうした運営体制が慶応年間において改革組合村の存在を積極的に肯定する要因となったものと考えられる。

以上、妻沼村組合では「改革組合村」を積極的に評価し、関東取締出役廃止後もその活用を強く望んでいたのが確認できる。妻沼村組合では、関東取締出役廃止後も改革組合村としての枠組みで取締活動することを企図し【史料三】の議定を作成したのである。そして、明治二年一〇月に、岩鼻県管下限りの組合村Ⅱ岩鼻県支配組合へと再編成されるまで、改革組合村の枠組みが活用されるのである。では、次項において岩鼻県管下における改革組合村の動向をみていきたい。

(二) 岩鼻県支配組合の編成

岩鼻県では、明治元年八月に管轄の村々に対して、改革組合村の維持を指示していることから窺えるように、積極的に改革組合村の機能を活用していた。⁽⁴⁵⁾その後、明治二年一〇月には、改革組合村を廃止し、支配限りの組合の編成を指示している。本項では、妻沼村組合を事例として、岩鼻県下において改革組合村がいかに継承されたのか、について検討したい。なお、忍藩領を除く妻沼村組合所属の村々は行政区画上、「明治元年、武蔵県知事支配↓同二年（一八六九）一月、大宮県↓同二年二月、岩鼻県↓同四年一〇月、群馬県↓同年十一月、入間県」、忍藩領の村々は、「明治元年、忍藩↓同四年（一八七二）七月、忍県↓同年十一月、入間県」という変遷をたどっている【表6】参照）。

妻沼村組合の多くの村々が所属した岩鼻県は、前述の通り、県役所を旧幕府の岩鼻陣屋跡に置いた直轄県である。⁽⁴⁶⁾その管轄は、上野国全域と武蔵国一一郡の旧幕領・旗本領・寺社領含むという広大な地域であり、明治二年一二月には版籍奉還をした吉井藩を吸収し、諸藩の支配が錯綜した三六万石の地域を管轄していた。こうした状況では、自然、改革組合村の設置以前のように「支配違い」が取締活動を困難にしていた。明治二年六月の岩鼻県知事・小

室信夫から民部官への問い合わせからは、当時の岩鼻県が管轄する地域の治安状況が窺える。⁽⁴⁾

【史料四】

当県管轄所之儀ハ、幕政之頃ヨリ上州無宿或ハ長脇差抔ト申唱奸民無頼之徒多致徘徊候場所之上、昨春邦内一
 円騒立、村毎ニ富貴ヲ打潰及乱暴、繼テ兵馬之事ヲ目撃仕、人心自然ト殺氣ヲ帶不穩之所へ、今般東京府戸籍
 改正被 仰出、奸民於村下潜伏難叶、近隣へ散シ候モノカ、又ハ奥越之境界ヲ接居候故、昨年来彼地へ脱走ノ
 者共密ニ府下へ立帰候モノカ雪解後ハ就中兇惡ノ輩党ヲ結び及暴行、良民ノ妨害不勘苦訴、日夜無間斷、既ニ
 先月初旬ヨリ当月廿日迄ニ強盜七十人余召捕、余程嚴重ニ致手配居候得共、各藩入交之土地、自ラ潜居ノ余地
 モ有之ト相見、賊盜甚多、近日ハ捕亡ノモノ所々ニテ闕、屢疵ヲ蒙候而已ナラス、武州児玉郡八幡山町ノ押ニ
 囚人入置候所、去十三日夜十七八人ニテ押来、番人ニ為負深手、檻打毀シ囚人奪去、又ハ十九日夜上州金子村
 捕亡方附治太夫方へ廿三四人ニテ襲、治太夫ヲ切害シ家財奪去候様之事每有之、昨今三国峠辺抔ハ旅人通行無
 之抔申程ノ義ニテ、在県之捕亡使計ニテハ、迎モ召捕方行届兼候ニ付、上州各藩・武州忍・岡部両藩等へ申談
 シ、右捕亡ノ者为差出、当県出役之者ト示合、上州全武州管轄所中宿駅ハ勿論、国境間道迄モ狩立、手ニ余リ
 候ハバ、時宜ニ寄打捨候様令シ度候ニ付テハ、兼テ藩兵ヲ於県遣候事、禁令モ有之候ニ付、兵ト申ニハ無之候
 得共、此段為念御届申上候也

岩鼻県知事 小室信^(マツ)太夫

民部官

岩鼻県管轄の上野国は旧幕府時代以来、「奸民無頼之徒多致徘徊候場所」という土地柄であり、打ちこわしや一揆
 が多発していた。そうしたところ、東京で行われる戸籍改正にともない、「奸民」による犯罪が多発していた。五月

初旬から六月二〇日の間まで、強盜七〇人余りを召し捕り、嚴重に手配しているが、各藩が入交っており、多くの賊盜が潜んでいた。こうした「支配違い」の問題に対しては、「在県之捕亡」だけでは対処できない状況であった。そこで岩鼻県では、近隣の諸藩と協議を行い、連帯して盜賊等の取締を行うことを決めている。そして、手に余る場合には殺害しても良いか、ということについて民部官宛に願書を提出したのである。これに対しては、行政官名義で許可をされている。⁽⁴⁸⁾つまり、改革組合村を運用し、超領主的な取締活動を行った関東取締出役が廃止された後、明治新政府は従来の改革組合村を活用するが、実態としては再び他支配との「支配違い」が障害となり十分な機能を発揮していなかったといえる。そして、それは改革組合村編成以前のように、取締活動を困難にさせ、一層の治安の悪化を招いたのである。岩鼻県ではこうした状況を踏まえて、支配限りの組合村の編成を指示するのである。⁽⁴⁹⁾

【史料五】

今般府藩県三治一致之御趣意ニ付、於諸藩も各藩知事奉職之上者管轄下、取締之儀も其藩ニ而取計候義ニ付、是迄之支配々々打交、取締組合寄場大小惣代者廃止、組合者解放候間、只今県管轄下而已最寄拾ヶ村宛一組二改、組合其中より人撰之上、壹人年限を以、惣代之者相立置、廻在之出役より及指図候、取締者勿論御布告御趣意教諭等、右之者より村々江為申諭、取締向万端行届、無宿無頼之者共不立廻様為取斗候間、宿町村々都合宜様村々組合可申事

但本領安堵之領知并管轄地ニ孕候社寺領村々可組合者勿論、組合拾ヶ村ニ而不都合之場所者、五六ヶ村より拾五六ヶ村組入候而も不苦事

一、組合村ニ組替相成、入用相懸り候而者、難義可致間、管轄所為取締廻在いたし出役之者、囚人於場所日数逗留取調候義者、相止召捕次第探索書并見込書を以、直ニ当県江差送候旨ニ付、村々ニおゐて差押候惡徒共者、

最寄出役無之候ハバ、悪事之始末書取を以、其村方より直ニ可差出事

右之通り相心得、最寄ニ而組合組替、来月十五日迄組替相成候名主連印を以可申立、猶追々相達義も可有之候得共、先右之趣、小前末々迄不洩様、可申聞置候、此廻状村名下令受印、急順達従留村可相返候也

十月

岩鼻県

新町宿

(他四ヶ村宿略)

岩鼻県は、①取締組合大小惣代の廃止、②組合村を「解放」し、岩鼻県のみの一〇ヶ村で組合村を編成（必ず地続きの村）、③新たに惣代の選任を指示し、これらを、翌二月一日までに名主連印の上、岩鼻県に届出ること、④取締出役の逗留に伴う費用の軽減、というように、従来の改革組合村を一度解体（「解放」）し、所管地域限りの組合村の編成を指示した。なお、岩鼻県支配組合を指揮し、取締活動を行う「廻在之出役」とは、前述の「岩鼻県取締出役」のことである。

以上、明治新政府や岩鼻県の指示により、明治初年においては改革組合村の枠組みが残されたが、再び「支配違ひ」の問題が生じた。そこで、改革組合村を廃止し、岩鼻県支配組合が編成されるのである。では、地域社会（忍藩領を除く旧妻沼村組合）は、岩鼻県支配組合の編成をどのように行ったのか。次項において検討したい。

(三) 妻沼村組合の解体と岩鼻県支配組合への組替

明治二年一〇月、前述の通り岩鼻県により改革組合村の廃止と岩鼻県限りの支配組合の編成を指示された妻沼村

組合では、「今般 御取締組合最寄村々新規組替被仰付候ニ付、元妻沼村組合式拾八ヶ村之内当 御支配所私共最寄相談仕」⁵⁰⁾というように岩鼻県支配組合を構成する村を旧妻沼村組合村々の相談によつて決めている。結果として旧妻沼村組合は、①上江袋組合（上江袋村・原井村・飯塚村・堀米村・太田村・市之坪・道ヶ谷戸村・西野村・田島村・上根村）、②妻沼村組合（※岩鼻県支配組合としての枠組み）、③葛和田組合に再編されている。しかし、次の史料に確認できるように、支配組合を統括する「肝煎名主」の選出は地域住民に委ねられ、入札によつて選出された。⁵¹⁾

【史料六】

乍恐以書付奉願上候

御支配所武州旂羅郡太田村外九ヶ村役人一同奉申上候、今般御取締筋新規組合村取極メ、右之惣代役之者人撰申立様被仰渡候ニ付、最寄村々談判之上、組合村数之儀を別帳之通り相極メ候間、惣代役之儀、人撰入札仕、上江袋村名主長作落札ニ付、当巳十一月より来午十一月迄同人江、御役義被仰付度、就而者組合之内添役之者相建置候間、長作勤役中病氣其外差支之義も有之節者、右添役之者、御用向無御差支相勤候間、何卒右之段御聞済被成下置度、村々役人連印を以奉願上候以上

明治二年巳年十一月日

武州旂羅郡永井太田村

百姓代吉弥^印

組頭本三郎^印

名主五平^印

（他九ヶ村二十七名略）

岩鼻県

御役所

右の史料からは、旧妻沼村組合において大惣代を勤めた長嶋作左衛門（「長作」）を肝煎名主に選出しているのがわかる。すなわち、改革組合村を「解放」し、「御取締筋新規組合村」として岩鼻県支配組合を編成するが、その編成方法は改革組合村の再編・分割であるとともに、肝煎名主には改革組合村の元大惣代が選出されるなど、その実態は改革組合村の経験を継承するものであった。

なお、肝煎名主の職務については、明治三年正月に岩鼻県より肝煎名主のおおまかな職務内容が示され、翌二月には肝煎名主の職務および組合村の活動に伴う費用負担に関する四六ヶ条にも及ぶ心得書が示されている。⁽³²⁾これら岩鼻県が示した職務内容によると、肝煎名主の活動は「長脇差を帶、又者鎗・鉄炮等を携江押歩行無宿無頼之徒、其外風俗怪志きもの組内立廻り候ハバ、無用捨差押」⁽³⁴⁾える等の治安取締のほか、村民の風俗矯正、入用儉約による経費削減など旧来改革組合村で行われていた業務と類似の活動を行う事が示された。こうした肝煎名主の立場は、「其組合伝達之事件をはじめ諸世話驅引之役務たり、時ニ寄り組合中之惣代ニも相立事ニ付、謹而 御仁政之御趣意を奉戴し、諸事正直を旨とし可遂情勤事」⁽³⁵⁾とある。すなわち、肝煎名主は、組合村々の惣代であるとともに、岩鼻県支配の末端として位置づけられているのである。こうした肝煎名主の位置づけからか、治安取締の業務以外にも「戸籍之取調」や「租税取立方品旧弊有之村方も有之哉之趣、若不正之筋有之、米金共御役所割賦之通り割合取立、右取立帳寄付通り不足迄記印、小前江為見届、疑念無之様取計」⁽³⁶⁾など、租税取立てに関する事柄も「取締」の範疇として職務に含まれていた。さらには、「組合中家々離散せざる様相心掛、孤独廢疾□□之窮民抔難渋も有之ハ行詰さる中扶助之手当をなすへし」⁽³⁷⁾と、「百姓成立」⁽³⁸⁾の保証を肝煎名主に転嫁している。このように肝煎名主は地域

において岩鼻県支配の補完を期待され、また「取締」という観点から広範な業務を担った。なお、肝煎名主および道案内の給金は、岩鼻県からの支給ではなく、あくまでも郡中高割で支出する事が決められており、岩鼻県の掌握する範囲の中で、地域主導の組合村運営が行われた。⁽⁹⁹⁾

こうした支配組合編成直後の岩鼻県全域における支配組合の全体像は詳らかではないが、明治三年（一八七〇）一月の郷長制下における支配組合については、【表8】の通りである。上江袋村組合は、武州幡羅郡下奈良村居住の郷長・吉田市十郎の所屬となつてゐるのが確認できる。⁽¹⁰⁰⁾以後、明治四年五月に戸籍組合と再編するまで支配組合が活用されることになる。⁽¹⁰¹⁾

しかしながら、結果として岩鼻県支配組合の編成は岩鼻県が抱える治安問題の根本的解決にはつながらなかったようである。次の史料は、明治四年七月、岩鼻県知事・青山貞らが民部省役人へ提出した建白書である。⁽¹⁰²⁾

【史料七】

（前略）政令一ナラシメント欲セバ、速ニ藩ヲ廃止一州一県トナスニアリ、或曰、藩ニ士卒貫属ノ称呼アルモ、君臣ノ情自ラ存シ民庶モ亦旧古ヲ慕フヲ以テ、俄ニ変革シ難キノ情実アリ、嗚呼コレ儉安家ノ説ニシテ識者ノ不取ル所ナリ、夫其旧古ヲ忘レ、其情実ノ離ル、ヲ埃タバ、何ノ日カ政令一致維新ノ実効ヲ奏セン、況ヤ方今海内万国ノ交際ヲナス、内政一致国用充実セズンバ有ベカラズ、故ニ断然改革士民ノ耳目ヲ一新□□スルニアリ、就中当県管下ノ儀ハ、上武二州ニ涉リ周囲概シテ二百余里、其間ダ十二藩ト犬牙錯綜、前段ノ習弊モ亦少ナカラズ、総テ施為スル事緩急机ヲ失シ、人民疑惑ヲ抱キ、眼前近小ノ事スラ猶行ハレ難シ、況ヤ遠大ノ事業ヲヤ、仰ギ願クハ、御英断ヲ以テ先ヅ施行ノ御手初ニ当岩鼻県ヲ廃止諸藩庁ヲ解キ、更ニ上野県ヲ置キ民庶ノ疑惑ヲ免レシメンヲ、其施設ノ方法概略如左（後略）

明治初年、岩鼻県における村落支配

【表8】郷長持場・支配組合（明治3年（1870）11月21日当時）

郷長	国郡	組名	村数
大館謙三郎 掛持 (上州新田郡下 田中村)	上州群馬郡	玉村宿組	15
	上州那波郡	連取村組	7
	上州勢多郡	大間々村組	12
	上州山田郡	境野村組	9
	上州山田郡	桐生町組	11
	上州山田郡	上小林村組	10
	上州山田郡	下仁田山村組	10
	上州佐位郡	鳥村組	8
	上州佐位郡	野村組	14
	上州佐位郡	田部井村組	8
	上州新田郡	木崎宿組	10
	上州新田郡	下田中村組	12
	上州新田郡	新野村組	13
	上州新田郡	尾島村組	8
	上州新田郡	鳥山村組	9
村数211ヶ村 総石高 10万4500石余	上州新田郡	東今井村組	10
	上州新田郡	山之神村組	19
	上州新田郡	高岡村	8
	上州新田郡	太田町組	9
	上州山田郡	台之郷村組	9

郷長	国郡	組名	村数
鈴木十平 掛持 (上州甘楽郡宮 崎村)	上州群馬郡	岩鼻町組	14
	上州碓氷郡	鳥留村組	13
	上州碓氷郡	東上磯部村組	13
	上州緑野郡	神田村組	10
	上州緑野郡	上大塚村組	9
	上州緑野郡	新町宿海	10
	上州緑野郡	藤岡町組	9
	上州多胡郡	黒熊村組	12
	上州多胡郡	多胡村組	13
	上州甘楽郡	魚尾村組	14
	上州甘楽郡	川井村組	12
	上州甘楽郡	大日向村組	12
	上州甘楽郡	坂原村組	5
	上州甘楽郡	一之宮村組	10
	上州甘楽郡	麻府村組	8
村数186ヶ村 総石高 8万5500石余	上州甘楽郡	根本屋村組	11
	上州甘楽郡	上野村組	11

郷長	国郡	組名	村数
田中統一郎 掛持 (上州吾妻郡大 戸村)	上州群馬郡	西明屋村組	17
	上州吾妻郡	箱島村組	12
	上州吾妻郡	岩下村組	13
	上州吾妻郡	大戸村組	7
	上州吾妻郡	狩宿村組	7
	上州吾妻郡	大子村組	8
	上州吾妻郡	河原湯村組	7
	上州吾妻郡	中之条村組	17
	上州吾妻郡	師田村組	7
	上州吾妻郡	須川宿組	12
	上州利根郡	川上村組	8
	上州利根郡	湯原村組	8
	上州利根郡	善佳寺村組	11
	上州利根郡	尾合村組	8
	上州利根郡	大原新町村	10
村数168ヶ村 ^{*1} 総石高 4万4600石余	上州利根郡	平川村組	16

郷長	国郡	組名	村数
田島武平 掛持 (上州佐位郡都 島村)	武州児玉郡	都島村組	11
	武州児玉郡	本庄宿組	11
	武州賀美郡	小浜村組	10
	武州賀美郡	元阿保村組	9
	武州那賀郡	古郡村組	12
	武州那賀郡	駒衣村組	11
	武州児玉郡	蛭川村組	11
	武州児玉郡	金分村組	10
	武州児玉郡	渡瀬町組	10
	武州秩父郡	金沢村組	7
村数137ヶ村 ^{*2} 総石高 5万6200石余	武州秩父郡	太田村組	8
	武州秩父郡	下吉田村組	7
	武州秩父郡	小鹿野村組	15
	武州秩父郡	古大滝村組	5

郷長	国郡	組名	村数
吉田市十郎 掛持 (武州旛羅郡下 奈良村)	武州旛羅郡	石塚村組	11
	武州旛羅郡	葛和田村組	7
	武州旛羅郡	上江袋村組	10
	武州旛羅郡	妻沼村組	7
	武州旛羅郡	西別府村組	10
	武州旛羅郡	下奈良村組	11
	武州榛沢郡	寄居村組	11
	武州榛沢郡	岡村組	11
	武州榛沢郡	新戒村組	10
	武州榛沢郡	深谷宿組	13
	武州榛沢郡	榛沢村組	12
	武州榛沢郡	下大谷村	10
	武州榛沢郡	牧西村組	12
	武州秩父郡	大野村組	9
	武州秩父郡	上名栗村組	6
村数202ヶ村 ^{*3} 総石高 11万4300石余	上州邑楽郡	大久保村組	11
	上州邑楽郡	大曲村組	11
	上州邑楽郡	瀬戸井村組	10
	上州邑楽郡	下小泉村組	10
	上州邑楽郡	下中森組	10

出典：『太田市史』史料編（太田町、1987年）史料18「岩鼻県郡中数計表」を参考に作成

- ※1 「岩鼻県郡中数計表」には総村数が177ヶ村
- ※2 「岩鼻県郡中数計表」には総村数が136ヶ村
- ※3 「岩鼻県郡中数計表」には総村数が204ヶ村

右の史料は、岩鼻県および諸藩を廃止し、「上野県」を設置したいという趣旨の建白書である。このように岩鼻県知事・青山貞らが自ら岩鼻県の廃止を願ひ出た背景として、冗費削減や諸藩弊習の否定という狙いもあるが、とりわけ岩鼻県では、上野国・武蔵国にまたがる広大な管轄地と大牙錯綜する藩領により「人民疑惑ヲ抱キ、眼前近小ノ事スラ猶行ハレ難シ、況ヤ遠大ノ事業ヲヤ」という事態にあつたことが挙げられる。そこで、岩鼻県と隣接する藩領を統合した「上野県」の設置を県知事自ら願ひ出たのである。この建白書は「返書無之」却下されるが、結果として明治四年一〇月には群馬県へと統合されることで岩鼻県は廃止されることになる。なお、上野県設置の建白書提出から二ヶ月後の明治四年（一八七一）八月には、前述の通り岩鼻県知事・青山貞より史官宛に官員の増員を願ひ出ている。その願書には、岩鼻県の官員組織、殊に取締に関わる官員について「当時捕亡之者僅二三人ナラテハ無之」と記している。⁸³すなわち、岩鼻県においては、上野国・武蔵国という治安状況が不安定な地域を管轄するにも関わらず、①治安取締を担う官員の不足、②管轄地域において岩鼻県独自の組合村を編成するも改革組合村編成以前と同様に「支配違い」が問題となる等、如何に徳川幕政下における村落支配の仕組みを形の上で継承しているても、治安取締に関する問題の根本的な解決とはならなかった。結果として、こうした「支配違い」の問題、とりわけ顕著にその弊害が現れる治安の問題への対処が困難である事を重大な要因として、岩鼻県は廃止されるのである。

おわりに

以上、本稿で明らかとなったことをまとめた。

①岩鼻県創設当初の課題は治安取締にあり、その主な職務は「警備」にあつた。そこで、民政掛内の捕亡、取締

方という役職や秩父取締小鹿野出張所、吾妻利根両郡取締原町出張所などの出張所を設け対応をしていた。また、県創設から二年後の明治三年においても、基本的には旧幕府出身者により事務が遂行され、知事をはじめ一部の旧藩士が幹部として全体を掌握するという形で県政が運営されていた。岩鼻県官員の特徴として、官員には武士身分のみならず、少なからず地域の百姓出身者が登用されていたことが挙げられる。

②岩鼻県取締出役は、「郡中取締」に所属する官員がこの職を勤めたものであり、徳川幕政下で活動した関東取締出役の存在をモデルとしていた。また、上野国玉村宿組合元大惣代・渡辺三右衛門の日記からは、三右衛門と岩鼻県官員（のちに岩鼻県取締出役）嶋田良平が元関東取締出役の紹介で対面していることや、嶋田良平から元大惣代である三右衛門へ岩鼻県官員の行状および村落間の紛争に関する情報収集を内密に依頼していた事が確認できる。すなわち、岩鼻県では明確に徳川幕政下における関東取締出役および改革組合村大惣代を経験した人材を活用し、そのノウハウを村落支配に活用していた。

③明治二年一〇月、改革組合村の枠組みを「解放」し、岩鼻県管下村々のみに「組替」を行った岩鼻県支配組合が編成される。岩鼻県支配組合は各組合内での入札で選ばれた肝煎名主を中心に運営が行われた。この肝煎名主は岩鼻県支配の末端に位置づけられ、岩鼻県支配の補完をすることを期待されていた。しかしながら、岩鼻県管下村々のみで構成される岩鼻県支配組合では、改革組合村編成以前と同様に、「支配違い」の問題が顕在化し、治安問題の根本的解決には至らなかった。そして、結果として「支配違い」に起因する治安問題が岩鼻県廃止の重要な要因となる。その後、明治四年（一八七二）一〇月、岩鼻県は廃止され、群馬県（第一次）へと併合される。

本稿では、岩鼻県における治安取締の実態について、地方文書の記述を中心としながら検討を行ったものである。よって、岩鼻県政と中央政治の動向を関連づけた検討、岩鼻県官員構成の変容や各分課の職務内容とその実態、結

果的に十分な働きが出来なかった岩鼻県の治安取締体制が、群馬県（第一次）以後において如何に解消されていくのか等、明らかにすべき点、行うべき分析は多いが、本稿では基礎的な研究に留め、今後の課題としたい。

注

- (1) 中島明「岩鼻県創設過程の基礎研究」『群馬県史研究』第九号、一九七九年三月。
- (2) 貝塚和実「明治維新时期における直轄県政と民衆―利根川中流域の治水・水利問題をめぐって」『歴史学研究』第五四八号、一九八五年十一月。
- (3) 宮崎俊弥「大区小区制の形成と文書伝達―岩鼻県・群馬県・熊谷県の事例を中心に―」(群馬県立文書館編『双六』第一号、一九九四年)。
- (4) 前掲、宮崎俊弥「大区小区制の形成と文書伝達―岩鼻県・群馬県・熊谷県の事例を中心に―」(群馬県立文書館編『双六』第一号、一九九四年)。また、「熊谷県以前の県庁文書の残存がきわめて少ない」等の課題が挙げられ、「岩鼻県↓群馬県（第一次）↓熊谷県↓群馬県（第二次）」に関する研究が進めにくい状況が窺える。
- (5) 「岩鼻県の研究はほとんど手がつけられておらず、今後なお一層の史料蒐集とその体系化が要請されている」(『群馬県史 資料編一〇』(群馬県、一九七八年) 一九七八年) とする数十年前の課題は、市町村レベルでの自治体史の刊行により漸進しているものの、依然として解決されていないと認識している。
- (6) 平川新「郡中」公共圏の形成―郡中議定と権力―(『日本史研究』第五十一号、二〇〇五年)。
- (7) 改革組合村自体の評価および主眼とする機能については諸説あるが、森安彦『幕藩制国家の基礎構造』(吉川弘文館、一九八一年)、宮沢至孝「江戸周辺農村の取締構造―『寄場圈預』制を中心に―」(『地方史研究』第三二四号、一九九〇年)、吉岡孝「近世後期関東における長脇差禁令と文政改革」(『史潮』新四四号、一九九八年)、岩田みゆき「天保期における寄場組合大惣代と関東取締出役との情報交換の実態と特質」(『幕末の情報と社会変革』、吉川弘文館、二〇〇一年) など、多くの研究蓄積が存在する。

- (8) 坂本達彦「幕末における関東取締出役・惣代層の動向」『日本歴史』第六七五号、二〇〇四年)、同「慶応二年生糸運上徴収実施と改革組合村惣代層」(『関東近世史研究』第五九号、二〇〇五年)、児玉憲治「改革組合村の事件・紛争処理と地域秩序」(『関東近世史研究』第六六号、二〇〇九年)、拙稿「幕末期の改革組合村運営と大惣代」(『埼玉地方史』第六五号、二〇一一年)、同「近世後期における改革組合村の編成と運営の検討」(『埼玉地方史』第六八号、二〇一四年)など。
- (9) 宮谷県を事例に、改革組合村廃止後の直轄県下における治安取締、とりわけ道案内の動向を検討した研究として、安斎信人「宮谷県の村落支配」(『地方史研究』第三九号、一九八九年)がある。また、直轄県の個別研究としては、三浦茂一「明治維新期における直轄県の形成―宮谷県の場合―」(小笠原長和ら編『東国の社会と文化』、梓出版社、一九八五年)、飯島章「宮谷県の救恤政策」(『茨城県史研究』第九三号、二〇〇九年)、中村文「信濃国の明治維新」など。
- (10) 岩鼻県管下における村落レベルでの治安取締については、落合延孝「幕末期における村の治安と自警」(『歴史学研究』第八六〇号、二〇〇九年)参照。町村共同体による治安取締を通して、近世社会における町村自治を高く評価している。なお、明治十一年(一八七八)、三新法体制下において戸長の職務に警察権限に関する規定は無く、幕藩体制以来、連綿として続いた郷村の警察権が法制上から姿を消した事が指摘されている。以後、国家権力としての警察機構(＝国家による暴力の独占)により、治安取締が担われる。
- (11) 岩鼻県の創設と展開については、前掲、中島明「岩鼻県創設過程の基礎研究」(『群馬県史研究』第九号、一九七九年三月)および前掲、宮崎俊弥「大区小区制の形成と文書伝達―岩鼻県・群馬県・熊谷県の事例を中心に―」(群馬県立文書館編『双六』第一号、一九九四年)参照。
- (12) ①大音龍太郎(天保一〇年～大正元年／近江国以伊香郡大音村出身／当時軍監兼任) 在任期間＝明治元年六月一七日～同年十二月七日、②小室信夫(天保一〇年～明治三二年／丹後国与謝郡岩滝出身／阿波藩士) 在任期間＝明治元年十二月七日～同三年五月二三日、③中島錫胤(文政二年～明治三八年／阿波藩士) 在任期間＝明治三年八月二日～同四年一月一〇日、④青山貞(文政九年～明治三二年／福井藩士) 在任期間＝明治四年一月二五日～同年一〇月二日(『群馬県史』通史編四)(群馬県、一九九〇年)参照のこと)。

(13) 『群馬県歴史』 第一巻(群馬県文化事業振興会、一九七三年四月)、三頁

(14) 岩鼻県創設の翌七月一三日、明治元年七月には政府より岩鼻県に対して、官員組織を知県事・判県事・下吏の体制とするように「公達」が行われている、前掲、『群馬県歴史』 第一巻(群馬県文化事業振興会、一九七三年四月) 三頁。

(15) 「岩鼻県庁職制及び俸給」『新編 埼玉県史 資料編一九』(埼玉県、一九八三年)、八〇〇―八二頁。

(16) 上野県設置の建白書提出から二か月後の明治四年八月、岩鼻県知事青山貞および同県権大参事加藤祖一は、同年七月の廃藩置県により「人心洶然賊徒横行」のために捕亡担当の官吏増員を史官に願っている、『群馬県歴史』 第五巻(群馬県文化事業振興会、一九七六年四月)、一一三―一一五頁。

(17) 岩鼻県については、管見の限りほかにも次の史料が確認できる、①坂本計三家文書一四〇九「岩鼻県吏人名簿」(年欠／明治二年カ)、岩鼻鼻知県事一名(小室信夫)・大参事二名・聴訴掛二名・郡中取締掛兼一〇名・租税掛一八名(内二名見習)・監察掛五名(内四名附屬)・庶務掛一名・訟所掛四名・東京詰一一名カ(内給仕之番監獄上小役二名、下小役三名)の合計五四名が確認できる、②宮崎勝美家文書二七「官員名簿」(年欠、知県事を除く参事一名・権典事一名・九等出仕二名・大属四名・権大属一四名・十二等出仕二名・権少属一二名・史生四名・十五等七名・等外一等五名・等外二等六名・等外三等三名・等外四等二名・捕亡方兼門候并玄関番二名・上小使五名・給仕六名・白洲番三名、合計七九名の名前・姓名が確認できる、③高草木正太郎家文書五(二)「岩鼻県職員録」(年欠／明治二年二月)、知県事を除き、民政掛九名・取締方七名・吾妻利根両郡取締原町出張四名・秩父郡取締小鹿野村出張四名・執達掛三名・「」掛七名・御門番二名・役所詰小頭三名・使丁一名・岩鼻県御出役二名の合計四二名、④折茂幹一家文書四六七八「巖鼻県人員録」(年欠)、県知事小室信夫以下、官員の役職・姓名・名前・出身が記載されている、等。また、行政文書として「進退留」(明治三年～同六年)と題する史料が確認できる。いずれも年ごとに①名前、②役職の任免、③任免の日付、が書き付けられたものであり、岩鼻県官員の全体像を把握することは困難である。しかしながら、各年の「進退留」の記述からは、毎年多くの官員の任免が行われているのが確認でき、岩鼻県官員は非常に流動的なものであったことが窺える、(知事八四A―五九「岩鼻県官員進退録」(明治元年～四年)、知事八四A―六〇「官員進退達留」(明治四年)、知事八四A―六二「官員進退留」(明治五年)、知事八四A―六一「進退留」(明治四年～六年))(いずれも群馬県立文書館

所蔵)。管見の限り、年欠の史料が多い事や岩鼻県官員全体を時系列で把握できる史料が乏しく、こうした点が岩鼻県研究の障害となると考えられる。

(18) 前掲、『群馬県史 資料編一〇』（群馬県、一九七八年）。

(19) 金沢家旧蔵文書九三「元県令高島彈正殿ヨリ知県事大音龍太郎様江引渡諸書物目録控」（大倉精神文化研究所所蔵）。

岩鼻県では、こうした引継書類に基づいて、旧岩鼻代官所より様々な名目で村々へ貸し付けられた金銭の回収を行っていたと考えられる（例えば、明治元年十一月、岩鼻県附属宮崎終（修）吉より上野国邑楽郡瀬戸井村・下中森村や同国多胡郡東谷村に対して、「銅山相統金」として貸し付けた金銭の返納を指示している等／宮崎勝美家文書八一・八二「御用書付」）。なお、金沢家旧蔵文書九三「元県令高島彈正殿ヨリ知県事大音龍太郎様江引渡諸書物目録控」は岩鼻代官所および岩鼻県の実態を明らかにする上で重要な史料と考えられるが、本史料の詳細な分析については、今後の課題としたい。

(20) 宮崎有敬（一八三二～一八九五）、上野国佐位郡伊与久村宮崎有成の三男。のちに伊勢崎藩大属。群馬県出仕、権大属。内務省勸業寮出仕。明治一二年に群馬県において県会が開設されると初代議長を務める。

(21) 天田家については、渡辺尚志「関東における豪農層の江戸進出（2）——上野国群馬郡下滝村天田家の場合——」（『近世の豪農と村落共同体』東京大学出版会、一九九四年）参照。

(22) 岩鼻県では、天田善兵衛等のほかにも多くの百姓身分出身者の活用が確認できる、例えば①上野国山田郡相生町・佐羽吉右衛門（当分苗字帯刀・公用掛、明治元年二月申付、新井宝家文書九五九（群馬県立文書館所蔵）、②上野国山田郡・森口重郎右衛門（当分苗字帯刀・公用掛、明治元年二月申付、新井宝家文書一〇〇一（群馬県立文書館所蔵）、③上野国山田郡龍舞村名主・武藤幸助（郷中取締兼会計方、慶応四年二月、武藤文二家文書三三九（群馬県立文書館所蔵）、④武蔵国旗羅郡下奈良村名主吉田市右衛門（市十郎）（郷長、明治三年一月二〇日申付、野中家文書六七三（埼玉県立文書館所蔵））など。

(23) 原出張所の場合、慶応四年八月、治安及び年貢納入の問題を理由に、原町住民の新井三左衛門（昇三・善教）・松井兵右衛門（逸郎）より原町出張所建設の建言が行われ、翌明治二年二月に原町出張所が完成している。しかしながら、大

音龍太郎から小室信夫への知県事交代による行政改革により、明治二年五月には廃止されてしまふ。詳細は、『原町誌』(群馬県吾妻郡吾妻町、一九六〇年)参照。なお、原町出張所の建言を行った新井・松井は岩鼻県に登用され、官員として県の運営に関わっている。

(24) 知事八四A―五九「岩鼻県官員進退録」(群馬県立文書館所蔵)。

(25) 高橋伸拓「明治初期、地方官員の編成と高山役所地役人」(『近世飛騨林業の展開』、岩田書院、二〇一二年)、同「明治初期における足柄県政の成立と展開―旧韭山代官所の動向を中心に―」(小田原近世史研究会編『近世南関東地域史論』、岩田書院、二〇一二年)など。この点については、慶応四年、最後の岩鼻陣屋代官である高島弾正体制下での代官役人組織が判然としないため詳細は不明であるが、岩鼻陣屋の場合には、世襲により代官が勤められていなかったために、旧所屬が代官手附・手代であっても、必ずしも岩鼻陣屋に出仕していた者ではない可能性に留意する必要がある。

(26) 前掲、『群馬県歴史』第一卷(群馬県文化事業振興会、一九七三年四月)、六頁。

(27) 森田家文書四二六「乍恐以書付奉申上候(助次郎出奔二付御届)」(埼玉県立文書館所蔵)、岸田氏収集文書一九二「乍恐以書付奉申上候」(埼玉県立文書館所蔵)など、岩鼻県管下の各地で確認できる。なお、明治三年頃より「岩鼻県取締出役」に代わり、「巡検方」と称される。長嶋家一〇一「肝煎名主江御沙汰写并雛形写」(埼玉県立文書館所蔵)にも年代は不詳であるが、「御取締御出役者自今御巡検御出役と唱替之事」とある。

(28) 森田家文書二九六一「(悪人召捕手配証書)」、森田家文書六八六八「(悪者探索方二付)」。

(29) 前掲、森田家文書二九六一「(悪人召捕手配証書)」。

(30) 門前区有文書一六「御達御請書」(群馬県立文書館所蔵)。

(31) 桐生市図書館所蔵文書(書上家文書) A二一六五「御尋二付以書附奉申上候」(群馬県立文書館所蔵)。

(32) 上野国那波郡福嶋村大久保氏知行所名主渡辺三右衛門によって記された日記(天保一三年(一八四二)～明治二年(一八六九)/計二九冊)(以下、「三右衛門日記」)。三右衛門は上野国玉村宿組合の大惣代(在任期間は弘化三(一八四六)一月二八日～慶応二年三月(一八六六))を勤めた。なお、三右衛門、慶応四年当時は六二歳。

(33) 前掲、「三右衛門日記」、明治元年二月二〇日条、五八七頁。

- (34) 前掲、知事八四A―五九「岩鼻県官員進退録」(群馬県立文書館所蔵)。なお、徳川幕政下においては、上総国山辺郡桂山村名主であり、領主旗本小栗氏より苗字帯刀を許されている。そして、「桂山村のリーダー」であると共に「小栗氏の村落支配あるいは知行所運営にとつて」欠くべからざる存在であった事が指摘されている、詳細は川村優「小栗氏の知行所支配―幕末期の動向を中心に―」(『旗本領郷村の研究』岩田書院、二〇〇四年) 参照。
- (35) 嶋田良平に比べると日記に記載された情報は少ないが、たびたび元関東取締出役・木村誠一郎と思われる岩鼻県官員が玉村宿へ旅宿するに際して三右衛門と接触している「木村誠一郎岸屋半右衛門方御旅宿、木村様より御逢ひ之由申越候二付罷出、御用ニ懸り候」(前掲、『三右衛門日記』明治二年六月二一日条、六七五頁)。
- (36) 前掲、『三右衛門日記』明治二年二月三日条、六二一―六二七頁。
- (37) 知事八四A―五九「岩鼻県官員進退録」(群馬県立文書館所蔵)では、「門倉勇」とあり、明治二年一月に「取締方助」を仰せ付けられている。
- (38) 前掲、『三右衛門日記』明治二年三月五日条、六三五頁。
- (39) 妻沼村組合の構成村数について、「原井」(八木田村に含まれる)と「大野」(葛和田村に含まれる)を一ヶ村と数えるか否かにより村数が異なっている。例えば、長嶋家文書五六二「御改革式拾八ヶ村高書付其外御役儀被仰付候請書控」では、二八ヶ村と数えられるなど史料により異なる場合がある。
- (40) 妻沼町誌編纂委員会編『妻沼町誌』(妻沼町役場、一九七七年三月)、二二六頁―二四六頁。
- (41) 長嶋家文書一二八「組合議定書之事」。
- (42) 米崎清実「改革組合村の構造―武州多摩郡日野宿組合を事例として―」(村上直編『幕藩制社会の展開と関東』、吉川弘文館、一九八六年、坂本達彦「幕末期における関東取締出役・惣代層の動向―地域社会の変容と中間層―」(『日本歴史』第六七五号、二〇〇四年八月) など。
- (43) 長嶋家文書五五二「組合高並寄場役人大小惣代道御案人名前帳」。
- (44) 長嶋家文書三二七「妻沼村渡舟出入人足名前書上」など。
- (45) 高崎市市史編さん委員会編『新編高崎市史 資料編五 近世Ⅰ』(高崎市、二〇〇二年三月)、九五一頁。

(46) 岩鼻県設置までの経過については、前掲、中島明「岩鼻県創設過程の基礎研究」〔『群馬県史研究』第九号、一九七九年三月〕。

(47) 『群馬県歴史』第五卷（群馬県文化事業振興会、一九七六年四月）、一〇九頁～一一〇頁。

(48) 前掲、『群馬県歴史』第五卷（群馬県文化事業振興会、一九七六年四月）、一一〇頁。

(49) 長嶋家文書五五〇「御取締組合村組合被仰渡写・御取締組合村取極願」。

(50) 前掲、長嶋家文書五五〇「御取締組合村組合被仰渡写・御取締組合村取極願」。

(51) 前掲、長嶋家文書五五〇「御取締組合村組合被仰渡写・御取締組合村取極願」。

(52) 折茂幹一家文書一二四八「条々」（群馬県立文書館所蔵）。

(53) 岩鼻県支配組合編成直後の明治二年二月、岩鼻県管下武蔵国旌羅郡下奈良村名主吉田市右衛門より岩鼻県に対して、組合村の活動に関わる負担等について一六項目の伺が行われており、岩鼻県の提示した心得書には伺の回答と思われる項目が存在する、（高草木浩平文書A二九「組合心得方伺他」）（群馬県立文書館所蔵）。

(54) 「岩鼻県肝煎名主心得書」〔『群馬県史 資料編九』（群馬県、一九七七年）、一二五～一二九頁〕。

(55) 前掲、折茂幹一家文書一二四八「条々」（群馬県立文書館所蔵）。

(56) 前掲、「岩鼻県肝煎名主心得書」〔『群馬県史 資料編九』（群馬県、一九七七年）、一二五～一二九頁〕。

(57) 前掲、折茂幹一家文書一二四八「条々」（群馬県立文書館所蔵）。

(58) 深谷克己『百姓成立』（塙書房、一九九三年）。

(59) 前掲、長嶋家一〇一「肝煎名主江御沙汰写并雛形写」。岩鼻県支配組合では、組合村で議定を作成する際には案文をもつて岩鼻県へ伺いを立てる事等が指示されている、前掲「岩鼻県肝煎名主心得書」〔『群馬県史 資料編九』（群馬県、一九七七年）、一二六〕。

(60) 郷長には、明治三年二月二日、大館謙三郎・田島武平・田中蹉一郎・鈴木重平・吉田市十郎の五名が任命された。郷長の職務は、担当地域内の取締や訴訟問題の取り扱い、年貢徴収に関する業務を行った。

(61) 戸籍区組合村以降の地域社会の動向については、前掲、宮崎俊弥「大区小区制の形成と文書伝達」〔群馬県立文書館編

『双六』第一号、一九九四年）を参照頂きたい。

(62) 『群馬県史 資料編二二』（群馬県、一九八七年二月）、一三三～一三四頁。

(63) 前掲、『群馬県歴史』第五卷（群馬県文化事業振興会、一九七六年四月）、一一三～一一五頁。

【付記】 本稿は、日本風俗史学会月例報告会（平成三二年（二〇一〇）一〇月二九日 於明治大学）における報告を成稿したものである。史料の閲覧にあたっては、茨城県立歴史館・熊谷市史編さん室・群馬県立文書館・埼玉県立文書館の方々にお世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

（二〇一四年十二月十四日受理、二〇一五年一月十七日採択）